

# 國學院大學學術情報リポジトリ

『無名草子』コソ係結文の文構造：  
主部のいろいろな付随するコソと結び述部のいろいろ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 主部のいろいろ, 述部のいろいろ, コソ係結名詞文, コソ係結動詞文, コソ係結形容詞文 キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001688">https://doi.org/10.57529/0002001688</a>

# 『無名草子』 コソ係結文の文構造

## ―主部のいろいろに付随するコソと結び述部のいろいろ―

中村 幸弘

キーワード…主部のいろいろ、述部のいろいろ、コソ係結

名詞文、コソ係結動詞文、コソ係結形容詞文

まえがき

『無名草子』は、新編日本古典文学全集本（以下、新全集本と呼ぶ）『松浦宮物語／無名草子』でそのページ数を確認すると、一七三ページから二八五ページ八行までの一一ページ八行である。その文章構成は、「また、」で次々と展開していついて、段落として区切る意識がまったく見られない。そうではあっても、序も終章も、鮮明にそれとわかる表現が配されている。序は、この評論集の筆録者の役割を担う老尼によって歴史物語の体裁を借りて述べら

れる。老尼が最勝光院の門内に入ると持仏堂があり、若い女房たちから語りかけられたので、法華経の末尾を読んで聞かせる。夜も更け、一部の女房は姿を消すが、残った三、四人が次々に語り始める。物語の批評、撰集の批評、女性の批評と続いて、終章は、男性の批評や天皇のお話は『世継』『大鏡』をご覧くださいと任せて、終わるともなく終わっている。新全集本は、その一一ページ八行を（一）から（六四）までに区切って、見出しを付随してくれてある。そこに、二四五語のコソが用いられていて、しかも、（八）から（四七）までに、そのコソが集中しているのである。さきごろ、筆者は、擬古文『徒然草』のコソ係結文のコ

ソがどのような文の成分に付随して用いられているかを整理して発表する機会を得た。<sup>(注)</sup>その折は、『徒然草』という注釈の行き届いた作品であったところから、調査対象としたコソ係結文の文意の読み取りで悩むところがなかった。

それに対して、この『無名草子』には、係結の結びの流れや省略や、現代の論理には一致しない係結関係用例なども見られた。加えて筆者の読解力をもってしてはその読み取りに躊躇するところも多く、何度かの中絶があったことを告白しておきたい。

さて、久しく筆者は、文を直接的に構成する文の成分を部と呼んで取り扱ってきた。<sup>(注)</sup>その姿勢で『無名草子』のコソ係結文を見たとき、長く漠然と認識していた述部が名詞に断定の助動詞を付けたものであるか、動詞（に助動詞を付けたものなど）であるか、形容詞（や形容動詞に助動詞を付けたものなど）であるかによって、名詞文・動詞文・形容詞文とする視点<sup>(注)</sup>で捉えていく必要を強く感じたのである。それは、それほどに、主部と呼んでよい文の成分に付随するコソが多い、ということであった。コソが付随した主部が構成する、そのコソ係結文は、『無名草子』の

場合、六とおりの別があるものと見えてきた。

小稿は、その報告であるが、それは、この著作者・藤原俊成女がそのようなとおりの構文を蓄えていた、ということとである。

### 一 主部に付随するコソが構成するコソ係結名詞文

古典語和文の名詞文は、その述部が名詞に断定の助動詞「なり」が付いている文に限られる。末尾にコソが付随した主部の場合、その名詞文の述部は名詞に断定の助動詞「なり」の已然形「なれ」に限られることになるが、もちろん、そこには、その「なれ」のバリエーションとしての「にてあれ」「にてはべれ」なども含まれることになる。

(1) ∴、涙<sup>こ</sup>そ、いとあはれなるものにてはべれ。(五〔捨てがたきふし―涙〕一八四⑮～一八五①)

右の(1)の文末「にてはべれ。」は、「なれ」に接続助詞「て」が介在するようになった中古末から中世にかけて現れた「にてあれ」の「あれ」が丁寧語「はべれ」に言い換えら

れた表現である。

○宮の大将こそ、いとよき人にてあれ。(四四〔緒絶えの

沼〕二五五⑪)

右例は人物名を主部にしたコソ係結名詞文で、ここも、「なれ」に「て」を介在させた、当代の新しい表現であった。

(2)また、「みつの浜松」こそ、「寢覚」狭衣ばかりの世の覚えはなかめれど、一言葉遣ひ、ありさまをはじめ、何事もめづらしく、あはれにもいみじくも、すべて物語を作るとならば、かくこそあるべけれ、とおぼゆるものにてはべれ。(二八〔みつの浜松〕二二五①～⑤)

右(2)は作品名を主部にしている、その印象を紹介した長い述部である。コソを付けた主部が構成するコソ係結名詞文である。その述部には引用文が含まれていて、そこにも、指示語副詞「かく」にコソが付いたコソ係結文が見られる。

○「寢覚」こそ、一取り立てていみじきふしもなく、また、

さしてめでたしと言ふべきところなけれども、一はじめより、ただ、人ひとりのことにて散る心もなく、しめじめとあはれに、心入りて作り出でけむほど思ひやられて、あはれにありがたきものにてはべれ。(二三〔夜の寢覚〕

二二四⑪～⑮)

右例もまた、述部の長い、作品名が主部となっているコソ係結名詞文である。そのように、作品名にコソが付随して主部となっているコソ係結名詞文は、他に二例あって、うち一例は述部末尾が「…さまなれ。」となっている(三八〔海人の刈藻〕二四八⑨～⑫)と、いま一例は述部末尾が「…さまにはべるめれ。」となっている(四六〔今の世の物語〕二五七⑥～⑧)とである。また、主部が「博雅三位だにかばかりの音は弾きたまはず」と時の人褒めはべりけるほどこそ、とあって、兵衛内侍の稀有な存在を評価する、その述部末尾が「…ことにてはべれ。」となっている(五八〔女の論―兵衛内侍〕二七五⑧～⑩)も見られた。

(3) 少しものなど思へるこそ、人は心苦しきふしにてあれ。

(二二)〔狭衣物語―人の論〕一二二②③

右(3)は、『狭衣物語』のなかで源氏の君と呼ばれた皇女について、すばらしいけれども好意が持てないと述べた後の一文である。そして、一般論として、少々物思いをしているほうが、同情できる点であるといっていると解される、この一文である。その「人は」は、人は総じてとか、人は誰しもとかの意で、挟み込まれてしまったものであるうか。ここまでのところで、コソが付随した主部が構成するコソ係結名詞文が八例検出できた。

以下に、主部に付くコソがコソ係結名詞文を構成しようとしていたと思われる二例について観察していくこととする。

○物語にとりては、蓬よもぎの宮みやこそいとあはれなる人〔 〕。

(三一)〔玉藻〕二四〇⑤

右用例の空欄部には、「なれ」なり、そのバリエーショ

ンなりを想定することができよう。

○また、「とりかへばや」こそは、続きもわるく、もの恐ろしく、おびたたしき気したるものさま〔 〕、なかなか、いとめづらしくこそ思ひ寄りためれ。(三一)〔玉藻〕二四〇⑭～二四一①コソハ)

右用例の空欄部には、「なれ」が想定され、場合によっては、さらに接続助詞「ど」が加えられて、逆接の関係で続く表現へと展開していくものと読みとることがきる。

既に確認した主部に付随するコソが構成するコソ係結名詞文八例と、それに関連する二例との、都合十例の存在を本節の用例として確認することができた。

本節において検出し、観察してきた、主部に付随するコソが構成するコソ係結名詞文は、第六節において取り上げる題述文「：こそ：はあれ。」構文が、その「はあれ」の上に、断定の助動詞「なり」の連用形に相当する「に」を挟み込むようになった結果もたらされたものと思っっている。追って、第六節において詳述したいと思っっている。

## 二 主部に付随するコソが構成するコソ係結動詞文

具体的な人間が主部となって、その動作を表す動詞が述部となるコソ係結動詞文は、この『無名草子』にあつては、極めて稀にしか見ることができない。

(4) 国基くにもとと申す歌詠みうたよこそ、『我が歌は、万葉集をもちてか  
かり所にする』とは申しけれ。(四八「撰集」二五九⑧)

⑨

国基という歌人が「万葉集をもつて抛り所なげころにしている」と申したそうです、と、その人物の具体的な動作（発言行はつごん為）を述べている、極めて稀な用例である。

○また、宮宰相みやさいらいこそ、いと心おくれたれ。(三四「今と  
りかへばや」二四五③)

「(心) おくる」という動詞が用いられているところから動詞述部文とはしてみたものの、存続の助動詞「たれ」(↓

たり)」で結ばれているところからも、その性情をいっていることが明らかで、形容詞述部文性が感じとれてくる用例である。形容詞を修飾することを原則とする副詞「いと」がその「心おくれたれ。」を修飾しているところからも、それが証明されよう。(三四「今とりかへばや」二四六①)

②の述部「(いみじく) 心劣りすれ。」も(五〇「撰集と女」二六二⑪)⑭文中の⑬⑭の述部「入りてはべるめれ。」も、品詞としては動詞であったり、動詞に始まる文の成分であっても、心情や状態を表している、形容詞述部文性の感じとれる用例である。

(5) それにつけても、そのことなからましかば、とおぼゆる  
ふしぶしこそはべれ。(三〇「みつの浜松」二三八⑭)

⑮

右(5)の主部「そのことなからましかば、とおぼゆるふしぶしこそ」の「ふしぶし」は、いくつかの点を意味し、その「点」は、問題となる事柄を指していて、形式名詞性の名詞といってもよいものである。述部は、「あり」か「なし」

かに限られて、この述部も、存在を表していて動作を表してはいないので、形容詞述部に近いものと見えてくる。

(二五)「夜の寢覚―めでたき人」(二二九⑦)は、挿入文としての「心より外なることこそあらめ、」だが、この用例も、述部は「あれ」の推量形「あらめ」である。(二二)「狭衣物語―人の論」(二二二⑮)モコソかシモコソか)も、挿入文としての「人しもこそあれ、」である。(二四)「夜の寢覚―ふしぶしの論」(二二八⑮)～(二二九①)モコソ)は、和歌に見る用例だが、「憂きもこそあれ」の「もこそ」までが共通する、述部「あれ」の用例である。

○何の至りなき女のしわざと言ひながら、むげに心劣り  
こそしはべれ。(二二)「狭衣物語―さらでもありぬべきこと」  
⑥～⑦文中の⑦)

右用例は、主部「心劣りこそ」に述部「しはべれ。」が応じている動詞述部文であるが、複合動詞「心劣りす」にコソが介在した表現に丁寧の補助動詞「はべり」を付けて結びとさせた係結文と見ることができよう。その「し」(↓

す)は自動詞で、感じられる意である。心情をいつていて、形容詞述部文に近いところにあると見えてこよう。(二四)「夜の寢覚―ふしぶしの論」(二二七⑭)～(二二九①)も、主部「現の心地こそ」に述部「せね」が続いていて、主部に付くコソが構成しているコソ係結動詞文である。その「せ」がサ変動詞「す」の未然形で、「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形である。この「す」も自動詞で、「せね」で感じられない意となるところから、形容詞述部文に近いところにあると見えてこよう。

(6)また、憎くはなきほどなる人柄、やむごとくなくなど持ち  
て、法師になりたむ折、嘆かせみむこそ、今少し(あ  
はれも)増さめ。(三八)「海人の刈藻」(二四九⑮)～  
二五〇②文中の二五〇①)～②)

右(6)の主部と見た「嘆かせみむこそ、」は、その「む」が準体法ではあっても推量の助動詞であるところから、順接仮定条件の接続部に相当しよう。奥方に嘆かせてみたりしたら、にに応じている「(あはれも)増さめ。」は、その条

件句にふさわしい雰囲気がそこに醸し出されてくることをいつていることになる。 (一三一「源氏物語―いとほしき女」一九五⑭) 一九六①) も、その主部「跡かたもなくやみなむこそ、」に依じている述部「偲びどころも」あらめ。」は、思い出されるような印象が残ることをいつていることになる。 (6) 「(あはれも) 増さめ。」も、この「偲びどころも」あらめ。」も、雰囲気や心情が生じることをいつているといえる。

以上、主部に付随するコソが構成するコソ係結動詞文が、十一例検出された。

さて、次の二例は、いずれも動詞述部文ではあるが、論理的には引用文内でなければならぬ結びが引用文外になつていたり、結びの活用形が誤られたりしている用例である。

○何事もあいなくなりゆく世の末に、この道ばかり  
こそ、(山彦の跡) 絶えず、(柿の本の庵) 尽きず、と  
かやうけたまはりはべれ。(五〇「撰集と女」二六二⑭)  
二六三①)

右用例の主部「この道ばかりこそ、」の述部は「(山彦の跡) 絶えず、」と「(柿の本の庵) 尽きず、」とで、複数述部とでもいったらよい文構造である。その、コソを付けた主部に依じる述部は、その論理に従えば、ともに序詞を冠した「絶えず、」と「尽きず、」とで、その「尽きず、」は「尽きね、」というように結ばなければならないように見えてくる。ところが、その引用文を受ける、引用文外の「うけたまはりはべれ。」が結びとなつていたのである。

○歌詠みの方こそ、元輔が娘にて、さばかりなりけるほどよりは、すぐれざりけるとかやとおほゆる。(五三「女の論―清少納言」二六七⑤) ⑥)

右用例は、引用文内に見るコソ係結動詞文であるが、その結びは「すぐれざりけれ」でなければならぬところである。

既に確認した主部に付くコソ係結動詞文十一例と、それに関連する右二例との、都合十三例の存在を本節の用例として確認することができた。

三 主部（対象語）に付随するコソが構成する  
コソ係結形容詞文

主部に応じた述部が形容詞や形容詞相当の活用語である場合、その主部について、時枝誠記は、これを対象語と呼んで取り扱った。<sup>(後述)</sup>以下、小稿においては、そのような主部を、主部（対象語）と呼んで取り扱うこととする。

(7)夕顔こそ、いといとほしけれ。(一三「源氏物語―いとほしき女」一九五<sup>⑬</sup>)

右(7)は、登場人物名を主部（対象語）としてコソを付随させて取り立て、どんな人物かを形容詞で表現するコソ係結形容詞文である。(一一「源氏物語―いみじき女」一九二<sup>⑭</sup>)(同一九二<sup>⑭</sup>～⑮)(二三「源氏物語―いとほしき女」一九六<sup>⑤</sup>)(三二「とりかへばや」二四一<sup>④</sup>)(三八「海人の刈藻」二四九<sup>③</sup>～④)(三九「末葉の露」二五一<sup>⑤</sup>～⑥)(四〇「露の宿り」二五二<sup>⑪</sup>)(同二五二<sup>⑬</sup>)(四二「宇治の川波」二五四<sup>⑩</sup>)(五四「女の論―小式部内侍」

二六八<sup>⑧</sup>～⑨)なども、人物名を取り立ててコソを付けた主部（対象語）に依じている述部が一単語の形容詞已然形で結ばれている用例である。

○また、「宮の宣旨こそ、いみじくおぼえはべれ。(五六「女の論―宮の宣旨」二七二<sup>②</sup>～③)

右例も、人物名を取り立ててコソが付随した主部（対象語）であるが、その述部は、形容詞とそれを受ける知覚性の動詞に丁寧の補助動詞が付いて構成されていて、形容詞相当語句といえることができる。(一三「源氏物語―好もしき女」一九四<sup>⑦</sup>)(二二「狭衣物語―人の論」二二二<sup>①</sup>～②)(二九「みつの浜松―人の論」一三七<sup>⑭</sup>～⑮)(四一「みかには咲ける」二五三<sup>⑩</sup>～⑪)なども、形容詞相当語句が述部となっているコソ係結形容詞文である。以上、人物名を取り立てたコソ係結形容詞文が十六例存在することが確認された。

(8)また、『花宴』こそいみじけれ。(一六「源氏物語―いみ

じきごと」二二三⑫)

右(8)の主部(対象語)は、『源氏物語』の巻名を取り立てたものである。作品名などの主部(対象語)に応じる述部が形容詞や形容詞相当語句となっている類型の用例として、(二一〇〔狭衣物語〕二二〇⑥)〜(四八〔撰集〕二五九⑪)〜(五三〔女の論―清少納言〕二六七⑩)〜(一)が存在した。各作品のなかの登場人物に比して、作品そのものを形容詞一単語で評することは、やはり難しかったのである。以上、作品名を取り立てたコソ係結形容詞文が四例存在することが確認された。

(9) …、夢こそ、あはれにいみじくおぼゆれ。(四一〔夢〕

一八四⑥)〜(8)

一単語の抽象概念性の名詞を取り立てた主部(対象語)に形容詞相当語句が応じて、コソ係結形容詞文となっている用例である。ただ、この一文、この部分に先立って、夢が頼りなくはかないことを、逆接確定条件接続部として述

べている。他に、(三二〔とりかへばや〕二四一②)〜(3)が存在し、抽象概念性名詞を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文は、その二例に限られた。そもそもが、随想的章段を存在させる『徒然草』とは、おのずから異なることになろう。<sup>(注6)</sup>

(10) また、宇治の姉宮の失せこそ、あはれに悲しけれな。

(一四〔源氏物語―あはれなること〕二二一⑫)

右(10)は、登場人物の死を意味する名詞「失せ」で括った名詞句にコソが付いた主部(対象語)に応じて形容詞相当語句が結びの述部となっているコソ係結形容詞文である。

以下の用例も、これと同趣の名詞句を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文であるところから、そのコソ直上の名詞を末尾に添えて、各用例の所在位置を紹介する。(一四〔源氏物語―男の論〕二〇一⑦)〜(8)まめ人(二四〔夜の寝覚―ふしぶしの論〕二二七②)〜(5)気色<sup>けしき</sup>など(二五〔夜の寝覚―めでたき人〕二二九③)〜(4)ありさま(同二二九⑤)〜(6)契り(二九〔みつの浜松―人の論〕二三七②)〜(3)人(三一

〔玉藻〕二四〇⑦〜⑨もとだち) (三二二「とりかへばや」  
 二四一⑤人柄) (三八「海人の刈藻」二五〇⑪多さ) (同  
 二五〇⑪) (⑬即身成仏) (三九「末葉の露」二五一④心ざま)  
 (四二「宇治の川波」二五四②) (③失せ) (四三「駒迎へ」  
 二五四⑭心用ゐ) (五二「女の論—小野小町」二六五⑫) (⑬果て) がその該当用例で、(10)と併せて、人物の行為や状況などを意味する名詞で括られた名詞句にコソが付随した主部(対象語)に応じたコソ係結形容詞文は、十四例存在することになる。

(11) …、鳥なき鳥の蝙蝠かろうほりとかやして、薰大将かをるの帝みかどの御婚むいにな  
 りたまふたまふを嫉ねむみて、眩くらき言ことばなどしありくほどこそ心づ  
 きなけれ。(一四「源氏物語—男の論」二〇一⑫) (二〇二②)

右(11)は、『源氏物語』の展開を踏まえた場面を取り立てて形式名詞性の名詞「ほど」を用いたうえでコソを付随させた主部(対象語)に形容詞が結びの述部となっているコソ係結形容詞文である。以下の用例も、これと同趣の名詞

句を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文であるところから、そのコソ直上の形式名詞性の名詞を末尾に添えて、各用例の所在位置を紹介する。(八「源氏物語」一八八⑧) (⑩こと) (二三「源氏物語—いとほしき女」一九七⑩) (⑮ほど) (一四「源氏物語—男の論」二〇二③) (⑤さま) (二五二「源氏物語—あはれなること」二〇九⑦) (⑧ほどのことども) (二六「源氏物語—いみじきこと」二二四④) (⑤ほどども) (一七「源氏物語—いとほしきこと」二二六⑧) (⑪ほど) (一九「源氏物語—あさましきこと」二一九⑨) (⑬ほど) (二四「夜の寝覚—ふしぶしの論」二二六⑥) (⑨ほどなど) (二七「夜の寝覚—大きな難」二三四④) (⑥ほど) (二九「みつの浜松—人の論」二三六⑥こと) (三二「玉藻」二四〇⑤) (⑦ほど) (三二「とりかへばや」二四一⑮) (二四二①ほど) (三五「心高き」二四六⑦) (⑪ほど) (同二四六⑪) (二四七①ほど) (三八「海人の刈藻」二四八⑬) (⑮さまども) (同二四九③ほど) (四〇「露の宿り」二五二⑭) (二五三①ところ) (四三「駒迎へ」二五五⑥) (⑦ほど) (六二「女の論—大斎院(選子)」二八二③) (⑥ほど) (六三「女の論—小野の皇太后宮(歎

子) 二八四②(⑩ほど) (同二八四⑫(⑬こと) がその該当用例で、概してその主部(対象語)の長い傾向が見られるが、いま一例、極端に長い例を紹介しておくこととする。

○唐土にて、八月十五日の宴に「河陽<sup>かうやう</sup>県<sup>けん</sup>后<sup>ご</sup>の琴<sup>こと</sup>の音<sup>ね</sup>聞かせむ」と帝のおほせらるる、御いらへは申さで、あざやかに居直りて、笏<sup>しやく</sup>と扇<sup>あふぎ</sup>とを打ち合はせて、『あな尊<sup>たふと</sup>』と謡<sup>うた</sup>ひたるほど、后に御覽<sup>ごらん</sup>し合はせて、后は我が世の第一のかたち人なり、中納言は日本にとりてすぐれたる人なり、と御覽<sup>ごらん</sup>するに、『月日<sup>つきひ</sup>の光<sup>ひかり</sup>を並べて見る心地<sup>こころ</sup>して、めでたくいみじ』とおほせられたるほどなどこそ、まことにめでたくいみじけれ。(二九(みつの浜松—人の論) 二三五⑭(⑮) 二二六⑤)

(11)と併せて引いた二十一例とに右に引いた一例とを加えて、二十三例が、形式名詞性の名詞で括られた名詞句にコソが付随した主部(対象語)に応じたコソ係結形容詞文ということになる。

(12)源氏、野分<sup>のわき</sup>の朝<sup>あした</sup>、まめ人の大将<sup>おほなづか</sup>、御方<sup>みかた</sup>々のありさま見ありきたるこそいみじけれ。(二六〔源氏物語—いみじきこと〕二二五⑨(⑩))

右(12)の主部(対象語)については、「まめ人の大将、」がそのなかに含まれるかどうかで、悩まされる。その「まめ人の大将、」を、主格助詞「の」が表出されていない場合と判断することによって、「まめ人の大将の、御方々のありさま見ありきたるこそ」が、連体形「たる」に準体法としてそこを名詞化しているものと読解することができよう。いわゆる連体形準体法の名詞句である。その連体形準体法の名詞句にコソが付随したコソ係結形容詞文が、この一文である。以下の用例も、これと同趣の名詞句を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文であるところから、そのコソ直上の準体法がどのような活用語の連体形であるかを末尾に添えて、各用例の所在位置を紹介する。(五〔捨てがたきふし—涙〕一八五⑦見る) (六〔捨てがたきふし—阿弥陀仏〕一八六⑥(⑪ける) (八〔源氏物語〕一八九①(②ぬ) (二四〔源氏物語—男の論〕二〇二⑤(⑥たまふ) (同

二〇二⑬～⑮はべる) (二二「狭衣物語―人の論」二二二①なる) (二三「夜の寢覚―ふしぶしの論」二二六⑫～二二七⑬) (二五「夜の寢覚―めでたき人」二三一⑦～⑧ある) (同二三一⑧～⑪たる) (二六「夜の寢覚―憎き」と) (二三二⑬～二三三①たる) (二九「みつの浜松―人の論」二三八⑦～⑨) (三三「隠れ蓑」二四二⑨～⑪なき) (三八「海人の刈藻」二四九⑭なき) (同二五〇③～④ぬ) (同二五〇⑦～⑩ぬ) (四二「宇治の川波」二五四①～②たる) (同二五四⑤～⑦たる) (四四「緒絶えの沼」二五五⑮～二五六②口ずさむ) (五〇「撰集と女」二六三⑤～⑦なき) (五三「女の論―清少納言」二六七⑪～二六八⑥ける) (五四「女の論―小式部内侍」二六八⑬～二六九①けむ) (五五「女の論―和泉式部」二七一⑭～二七二①はべる) (五九「女の論―紫式部」二七六③～⑤なき) (六〇「女の論―皇后宮(定子)」二七九⑧～二八〇④けむコソハ) (六一「女の論―上東門院(彰子)」二八〇⑧～⑨たまふ) (同二八一③～④けむ) (六四「男の論―終章」二八五②～④む) がその該当用例で、やはり、その主部(対象語)が長い傾向にあるが、特に長い一例を以下に紹介する。

○また、中納言、まめやかにもてをさめたるほど、いみじと言ひながら、まことの契り結びたる人のなくて、いづこにもただ夜ととももの丸寝まろねにて果てたるほど、むげにすさまじく、『河陽県后、切利天たうりてんに生まれたる』と空に告げたるほどだにいとまことしからぬに、また、かの后、吉野の君の腹に宿りぬ、と夢に見えたるほどなど乱りがはしく、切利天の命はいと久しくあなるを、いつのほどにかまたさることはあらむ、などおほゆるこそ、口惜くもせしけれ。(三〇「みつの浜松―まことしからぬこと」二三六⑤～⑫)

既に、名詞句が副助詞「など」を付けたものとして、(10)例の一群では「気色など」(二四「夜の寢覚―ふしぶしの論」二二七⑤)を見てきており、(11)の一群でも「ほどなど」(同二二六⑧～⑨)を見てきている。その「など」が、この連体形準体法名詞句には複数見られるところから、以下に取り立てておくこととする。

○宰相さいしやう中将ちやうの、病やまひよくなりて参りたるに、行き逢あひて、うち見て、腰こし礼じやばかりうちして行き過ぎたるほどなど

こそ、いみじく妬ねたけれ。(三九「末葉の露」二五一⑦)

⑨

右例は、「宰相中将の、病よくなりて参りたるに、「源中将ガ」行き逢ひて、うち見て、」までは、以下においての準体法化を意識していなかったであろうが、「腰礼ばかりうちして行き過ぎ」に至つて準体法によつて名詞化したと見られるような叙述である。ただ、その述部において「妬し」とする対象としては、その他の事柄も思い浮かびながら、そこに「など」の必要性が生じたかに思えてくるのである。同趣の名詞句を主部（対象語）とするコソ係結形容詞文が他に二例見られたので、どのような準体法に付く「など」かを添えて、以下に紹介する。(五七「女の論―伊勢御息所」二七三⑫)⑭はべるなど) (五八「女の論―兵衛内侍」二七五④)⑧けるなど) が、それである。

(12)としての一例に続いて列挙した、活用語連体形準体法名詞句にコソを付随させた主部（対象語）に応じるコソ係

結形容詞述部文は、二十九例であつた。続けて取り立てた、準体法活用語に副助詞「など」を付けた名詞句にコソを付随させた名詞句を主部（対象語）とするコソ係結形容詞述部文が三例数えられて、計三十三例が(12)の一群ということになる。

さて、ここで、主部（対象語）に和歌を含む用例が見られたところから、そこに注目した整理を試みることを許していただきたい。語学としての視点からは、せいぜいが、どのような性質も名詞によつて括られた名詞句であるか活用語連体形準体法から成る名詞句であるかぐらいの相違しかないはずであるが、小稿は、非論理的との非難を承知のうえで、この作品のコソ係結形容詞文が、その主部（対象語）にどのような事柄を取り上げていたかに関心があつたのである。既に、本節の(7)・(8)・(9)の別は、その関心に惹かれた結果で、登場人物名か作品名か、哲学的思索のテーマともいえる抽象概念一語名詞かの別だったのである。したがつて、以下においては、その名詞句が、形式名詞性的名詞句で括られているか、活用語連体形準体法から成っているかなどは、無視することになる。

(13)さまざま身を一方ならず思ひ乱れて、

鐘かねの音ねの絶ゆる響かねきに音ねを添ねへて我が世尽よきぬと君に

つたへよ

と詠みて、身を捨てたるこそいとほしけれ。(二三〔源

氏物語―いとほしき女〕一九七⑤～⑨)

右(13)は、浮舟がどのような心理状態で「鐘の音の」の歌を詠んで入水したかを主部(対象語)としたコソ係結形容詞文である。和歌を含む名詞句が主部(対象語)となっていて、その述部形容詞が形容詞相当語句となっているコソ

係結形容詞文として、(一五〔源氏物語―あはれなること〕

二〇七⑥～⑨る)(同二〇八⑮～二〇九⑥ある)(同二二二

④～⑧のたまふ)(二二一〔狭衣物語―人の論〕二二二⑫～

⑭る)(二四〔夜の寢覚―ふしぶしの論〕二二七⑬～

二二八①ある)(二七〔夜の寢覚―大きな難〕二三四⑦

～⑨たる)(三四〔とりかへばや〕二四四⑧～二四五②たる)

(三七〔岩打つ波〕二四七⑧～二四八④たる)(五五〔女の

論―和泉式部〕二七〇⑩～⑫けむ)(五七〔女の論―伊勢

御息所〕二七三⑭～二七四⑥ほどのことども)(六〇〔女

の論―皇后宮(定子)〕二七八⑨～⑭らむ)が該当し、

十一例数えられた。さきに、これらのコソ直上がどうである

かは無視するといったが、実は、各所在位置の末尾に書

き抜いていた。うち一例は「たるほどのことどもなど」

(二七四⑤)とあって、ストーリーの流れのなかの一部を

引いてその他もあることを含みもたせて主部(対象語)と

していることが感じとれよう。他は、すべて、活用語連体

形準体法である。「る(↓り)」「たる(↓たり)」は、いず

れも存続の意で、そういう状態性のテーマが主部(対象語)

とされていることが、これまた、感じとれてくる。

そこで、いま一例、三首の和歌が含まれる主部(対象語)

を紹介しておきたい。

○宇治の中の宮、薰大将をはじめて、

いたづらに分けつる未知の露しげみ昔おぼゆる秋の空

かな

と言ひやる朝に、兵部卿宮渡りたまひて、御匂ひの染

めたるを咎めたまひて、ともかくもいらへぬさへ心やま

しくて、

また人も慣れける袖の移り香を我が身にしめて恨みつ  
るかな

このたまへば、女君、

見慣れぬ中の衣しほもと頼めしをかばかりにてやかけ離れ

なむ

とて、うち泣きたるほどこそ、返す返すいとほしけれ。

(一七)源氏物語―いとほしきこと(二六)⑮(二七)⑩

その三首の和歌は、薫大将の和歌、匂兵部卿の和歌、中の君の和歌の三首である。「薫大将をはじめて、」周辺には脱文あるかとされていて、とにかく薫大将は中の君を訪れて一夜を過ごしたが、実事はなかった。そうではあっても、夫の匂宮は、二人の仲を疑う。「宿木」の巻での話である。

その夫の恨み言に対して、中の君が、移り香程度でご縁が切れてしまうなんて、と言って泣くあたりが、本当に気の毒だ、と、語り手が同情しているところである。新編日本古典文学全集本で、十行にもわたる主部(対象語)である。そして、ここも、そのコソの直上は、「(たる)ほど」となっていた。

(13)を代表とする、和歌を含んだ主部(対象語)とするコソ係結形容詞文は、代表の一例と、続けて列挙した十一例と、この十一行にわたる主部(対象語)の一例とで、計十三例数えられた。

そこで、本節の、主部(対象語)に付くコソが構成するコソ係結形容詞文を総括することとする。(7)を代表とする人物名を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文が十六例、(8)を代表とする作品名を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文が四例、(9)を代表とする抽象概念語名詞一語を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文が二例、次いで、(10)を代表とする人物の行為や状況などを意味する名詞で括られた名詞句を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文が十四例、(11)を代表とする、形式名詞性の名詞で括られた名詞句を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文が二十三例、(12)を代表とする、活用語連体形準体法によって構成された名詞句を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文が三十三例、(13)を代表とする、和歌を含んだ名詞句を主部(対象語)とするコソ係結形容詞文が十三例数えられた。これらを集計すると、この、主部(対象語)に付随するコソが構成する

コソ係結形容詞文は、一〇五例存在したことになる。

さて、主部（対象語）に付随するコソが構成した形容詞文にも、その係結の原則を外れた用例が見られはした。ただ、その係結の原則から外れた用例が存在しても、その程度は軽微であつて、それほどに、この主部（対象語）に付随するコソが構成するコソ係結形容詞文は、係結文としての意識が高い表現だつたと思えてくるのである。

○…、小野小町そののこまぢこそ、みめ、容貌かたちも、もてなし、心遣ひ

よりははじめ、何事も、いみじかりけむとおぼゆれ。（五二

〔女の論〕小野小町〕二六五②～④）

○…、大齋院こそ、めでたくおはしましけむとおぼえさせたまへ。（六二〔大齋院（選子）〕二八一⑭～二八二①）

右二例とも、現代の論理では、右前例の述部は「いみじかりけめ」であり、右後例の結びは「めでたくおはしましけめ」ではないかと思えてくる。しかし、古典語文においては、引用文内のコソの結びが引用文外の末尾に現れる用例を見るのである。既に小稿第二節において取り上げた

（五〇〔撰集と女〕二六二⑭～二六三①）にも見た引用文外の「うけたまはりはべれ。」に及んでいる用例もまた、その一例と見ることができたことになる。したがって、これらは、当代としては、至極当然な結びであつたといえることにならう。

○〔女三の宮こそ、いとほしき人とも言ひつべけれど、一袖濡そでぬらせとやひぐらしの〕と詠よみて、『月待ちても、と言ふなるものを』などあるほどは、いと心苦しきを、あまりに言ふかひなきものから、さすがに色めかしきところのおはするが、心づきなきなり。（一三〔源氏物語〕いとほしき女〕一九六⑩～⑭）

右例において、「いとほしき人とも言ひつべけれ」は形容詞相当語句と認められ、それに続く接続助詞「ど」がなければ、挿入文「女三の宮こそいとほしき人と（も）言ひつべけれ」というコソ係結形容詞文と認められるであろう。当代にあつては、そのように「ど」を付けて表現してしまうこともあつたという程度の、結びの流れである。

○また、隆信たかのぶの作りたるとて、『うきなみ』とかやこそ、殊ことの外ほかに心に入れて作りけるほど見えて、あはれにはべれど、一そも、などか言葉遣ひなど、手づつげにて、いと心ゆきておぼえはべらず。(四六「今の世の物語」二五六⑮～二五七⑳)

右例も、「あはれにはべれ」に続く接続助詞「ど」がなければ、挿入文「…、『うきなみ』とかやこそ、…、あはれにはべれ、」というコソ係結形容詞文と認められるところである。

○女中納言こそ、いといみじげにて、もとどりゆるがして子生みたるなどよ。(三二「とりかへばや」二四一⑪) ⑫

右例の主部は、少なくとも当時は、主部(対象語)として意識され、述部は、「いみじけれ。」という結びを想定していたらうとも思えてくる。その「いみじ」の活用形が決まろうとする過程で、女中納言に関する具体的な話柄が

脳裏に浮かんできて、「いみじ」は「げなり」を付けた形容動詞に転じ、文脈も大きく変わってしまったものとも見えてこよう。

○『千載集』こそは、その人のしわざなれば、いと心にくくはべるを、一あまりに人にところを置かるるにや、一さもおぼえぬ歌どもこそ、あまた入りてはべるめれ。(五〇「撰集と女」二六二⑪)⑬⑭コソハ)

右例は、主部「千載集」こそは、「は主部(対象語)として意識されていて、述部は、「(いと)心にくくはべれ。」という結びを想定していたであろう。そこで、言い切る直前で、藤原俊成の、歌人たちの地位、名声などに気兼ねする姿勢が脳裏に浮かんできて、その予定された結びを接続助詞「を」を付けて、接続部に転換させってしまったように思えてもくるのである。ここは、確かな結びの流れといえる用例である。

以上に見た用例は、いずれも、(7)・(8)を代表用例とする人物名と作品名とを取り立てた主部(対象語)の場合に限

られるのである。それら以外の係結の原則に外れるものは、次の一例だけである。

○また、…、後の振る舞ひさへこそ、心より外のことと  
言ひながら、一人しもこそあれ、この君の御もとなる人  
にしも取り持ちて行(い)かれたるほどは、…。(二一)〔狭  
衣物語―人の論〕二二二⑩～二二三⑫

右例は、長い一文で語る作品評のなかに見る、主部(対象語)「後の振る舞ひさへこそ、」に应じるはずの述部が係結の法則に従っていない用例である。『狭衣物語』のなかの、出家した道芝(＝飛鳥井姫)が常磐で書いた絵日記を、道芝没後、狭衣が見て涙を流すあたりを評価し、狭衣の目にとめられた当初、誘惑した仁和寺の僧と同車していたあたりを誹謗し、さらに、その後、狭衣を信じきれず、乳母の口車にのつて九州へ下向した行動は、自分から望んだことではないにしても、といおうとしたところが、このコソ係結の結びの見えないところである。こども、挿入文として「後の振る舞ひさへこそ、心より外のことなれ、」とか「後の

振る舞ひさへこそ心より外のことと言へ、」とかを想定していたのであろうが、続いて、コソ係結の挿入文「一人しもこそあれ、」が脳裏に生じていたりなどがあって、意味するところに変わりがない「…と言ひながら、」という逆接の接続助詞「ながら」を用いて表現してしまったのである。

(13)を代表用例とする、和歌を含んだ主部(対象語)に付随したコソが構成したコソ係結形容詞文のなかに、係結の原則に外れた用例を見ることはまったくなかった。(12)を代表例とする、活用語連体形準体法名詞句を主部(対象語)としたコソ係結形容詞文のなかに、係結の原則に外れた用例を見ることもまったくなかった。(11)を代表例とする、形式名詞性の名詞「ほど」などで括られた名詞句を主部(対象語)としたコソ係結形容詞文のなかに、係結の原則に外れた用例を見ることなどは、まったくなかったのである。

若干なりと、係結に問題ある、主部(対象語)に付くコソが構成するコソ係結形容詞文が、七例存在した。本節の、主部(対象語)に付くコソが構成するコソ係結形容詞文は、一二例となった。『無名草子』コソ係結文の首座にある

こと、明らかである。

#### 四 提題のハを付随させた主部（提題の文の成分）

とコソを付随させた主部（対象語）とから成る  
係結形容詞文

「象は鼻が長い。」文で、広く、その存在を知られているはずの構文だが、古典語文の「…は、…こそ形容詞（已然形）。」文についての論考を見ることがないようである。『徒然草』の「世は、さだめなきこそいみじけれ。」（七段）などと出合うたびに、そう感じつつづけている。「下戸ならぬこそ男はよけれ。」（二段）文は、「男は、下戸ならぬこそよけれ。」の順序を変えただけのものなのかどうかも、長く考えつづけてきている。前稿『徒然草』コソ係結文の構造と兼好の認識の論理<sup>(注1)</sup>では、この構文をA構文と呼んで、この構文から取り立てた。

もちろん、その構文は、コソ係結文だけでなく、広く総主文として、一定の注目はされてきている。ただ、その文頭の「…は、」の「は」には、ほぼ提題のはたらきが見えてきて、提題のハが付いた文の成分と見えてきている。あえ

ていえば、主部のうちの「主部（提題語）」とでも呼んで取り扱いたい思いでもある。本節で取り扱う文は、その「主部（提題の分の成分）」に、前節・第三節で取り上げた主部（対象語）に付随するコソが構成する係結形容詞文が続いていることになる。

(14)中にも、権中納言は、琵琶忍びやかに調べつつ、『徒  
冥入於冥永不問仏名』と口ずさみたまへるほどこそ  
いみじけれ。(三八「海人の刈藻」二四八⑮～二四九②)

右(14)は、『海人の刈藻』の登場人物について、一条院の遺児の権中納言と三位中将とがいらっしやるといった後、とりわけ権中納言は琵琶を奏でながら法華経の一節を口ずさんでおられるあたりがすばらしい、といっているところである。

○『有明の別れ』『夢語り』『波路の姫君』『浅茅が原の尚  
侍』などは、言葉遣ひなだらかに、耳立たしからず、  
いとよしと思ひて見てもまかるほどに、いと恐ろしきこ

ともさし交じりて、何事も醒さむる心地するこそ、いと口惜くちやくしけれ」など言へば、∴。(四六「今の世の物語」二五七⑫～二五八①)

右例は、提題のハが、四作品の書名に副助詞「など」を付けた名詞句に付いている用例である。その四作品について恐ろしいことも交じって、興ざめするような感じがするのは残念だ、といっている。

○∴、これは、千部を千部ながら聞くたびにめづらしく、文字ごとにはじめて聞きつけたらむことのやうにおぼゆるこそ、あさましくめでたけれ。(七「捨てがたきふし―法華経」一八六⑭～一八七⑤)

右例において、提題のハを付けた「これは、」の「これは、法華経を指して、聞くたびに新鮮な感じがして一文字ごとに初めて聞いて気づいたことのように思われる点が驚くばかりすばらしい、といっている。

(15) また「∴、同じ心なる友なくて、ただ独り眺ひとむるは、いみじき月の光もいとすさまじく、見るにつけても、恋しきこと多かるこそ、いとわびしけれ。」(二「捨てがたきふし―月」一八二⑧～⑬)

○まして亡なき人の書きたるものなど見るは、いみじくあはれに、年月としどきの多く積もりたるも、ただ今筆ふでうち濡ぬらして書きたるやうなるこそ、返す返すめでたけれ。(三「捨てがたきふし―文」一八三⑩～⑬)

右(15)も続く右例も、ハによって提題された事柄も、述部となつている形容詞に対してコソが付随して主部(対象語)となつている事柄も、いずれも活用語連体形準体法の名詞句である。提題された行為について、ある状況に限つた場合、どういふ印象が生じるかを述べている各一文である。

(14)とそれに準じて解せる二例と、(15)とそれに準じて解せる一例との五例が、この、提題のハを付けた主部(提題の文の成分)とコソを付随させた主部(対象語)とから成る係結形容詞文である。その提題のハを付けた主部について

は、「象は鼻が長い。」文の「象は」を総主語と呼ぶ呼び方を  
受け入れておいたほうがよいかなど、なお、判断  
できていない点も多く、当面、主部（提題の文の成分）と  
しておくこととする。

ところで、その提題のハが用いられていなくても、そ  
解せる構文の用例を見るのである。

(16)大納言「ハ、山へ登りざまに、そのたまたといふ童に逢

ひたるほどこそ、いみじくあはれなれ。(三八〔海人の

刈藻〕二四九⑤〜⑥)

右(16)の冒頭にある「大納言、」は、ハを付けていないが、  
ハがあるものとして読めようである。非表出のハ  
が見えてきてしまうのである。それだけではない。注  
(10)において触れた『土佐日記』の「死シじ子「ハ、顔「ハ  
よかりき。」(一月四日)は、ハもコソもない無助詞である  
が、死んでしまった子は器量がよかった、と解されている。  
そして、以下に引くように、類例が見られるのである。

(三九〔末葉の露〕二五二⑨〜⑫)(同二五二⑬〜二五二

①)(同二五二⑤〜⑦)(四二〔宇治の川波〕二五三⑭)  
二五四①)の各コソを末尾とする主部(対象語)の上に位  
置する主部(提題の文の成分)と見られる「宰相中将の心、」  
「大将の失ウせのほど、」「前関白大将、」「大将、」の各末尾に  
ハが想定されてこよう。三九の「末葉の露」には、該当  
用例が三例見られて、あるいはこの語り手女房の、一つの  
傾向化と思えてくる。

○∴、またありつる若き声にて、「ハ」「いまだ「源

氏物語」ヲ見はべらぬこそ口惜しけれ。∴∴」と言へば、

∴。(八〔源氏物語〕一八九①〜②)

右例は、一人の女房が『源氏物語』をあれほど傑作に  
作りあげたのは普通の人間のしわざとも思えない。」と言っ  
たので、別のある女房がそれに応じた発言である。「私は  
まだその『源氏物語』を見ていないことが残念です。」と  
いうように、自分の思いを述べた発言である。「ハ  
には、「わが思ひは、」などが想定されてこようか。そう感  
じとってしまうと、前節の第三節で取り上げた、主部(対

象語に付くコンが構成するコン係結形容詞文の多くが、このように「見えてきてしまうようでもある。実は、この用例は、既に、第三節の、主部（対象語）に付随するコンが構成するコン係結形容詞文として処理してきている一例である。『徒然草』においても、「〔命は、〕長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。」（七段）など、見えてきているところである。

(17) 『みかには咲ける』こそ、歌はよけれ。（四一）「みかには咲ける」二五三⑥

右(17)は、散佚物語『みかには咲ける』について、歌がすばらしい、といっているのだが、それは、歌だけがよい、ということなのだろうか。『徒然草』の「下戸ならぬこそ男はよけれ。」部分だけを見たとき、酒が飲めなくないのは男の場合に許されるというのか、男というものは酒が飲めることが望ましいというのか、まだまだ、多様に解せるようである。この『みかには咲ける』という作品については、その歌をどう評価したらよいのであろうか。『み

かには咲ける』という作品の評価が見えていなければ、この一文は読み解けないことになろう。

さて、この、提題のハを付けた主部（提題の文の成分）とコンを付けた主部（対象語）とから成る係結形容詞文にも、係結の原則を外れた表現は見られた。

○六条御息所<sup>みやすじころ</sup>は、あまりに物の怪<sup>ものけ</sup>に出でらるるこそ<sup>い</sup>恐ろしけれ<sup>ろ</sup>ど、人ざま、いみじく、心にくく、好もしくはべるなり。（二）「源氏物語」好もしき女」一九四①～②

右例は、六条御息所については、あまりにもしばしば物の怪となつて出られるのが恐ろしいという難点であるが、人柄は好ましい感じだ、といっている文である。その難点をそこまで言い切らないで、逆接の接続助詞「ど」を接続させたために、当初は結びの表現であった「恐ろしけれ」が流れてしまっていることになる。

ここで、提題のハを付随させた主部（提題の文の成分）とコンを付随させた主部（対象語）とから成る係結形容詞文に関連する用例が、(16)とその一群が五例、十分な読解に

至りえていない(17)一例、そして、この一群と見えて結びの流れている一例との七例を見てきた。

本節、提題のハを付随させた主部(提題の文の成分)とコソを付随させた主部(対象語)とから成る係結形容詞文は、併せて、十二例である。そして、それは、主部(対象語)に付随するコソが構成するコソ係結形容詞文でもあって、その、主部(対象語)に付随するコソが構成するコソ係結形容詞文は、一二四例存在することになって、この『無名草子』コソの半数を占めることになるのである。

### 五 題述文「…は…こそあれ。」文／「…こそ…は

あれ。」文(古型)の残存用例

『枕草子』には、「…は…こそあれ。」構文の用例が五例見られ、「…こそ…はあれ。」構文の用例が四例見られる。『源氏物語』には、「…こそ…はあれ。」構文の用例四例を見るだけである。以下のとおりである。

○をのこは、また隨身こそあれ。(枕草子・四六段・一〇三ページ)

○秋の野のおしなべたるをかしさは薄こそあれ。(同・六五段・二二二ページ)

○あやしくつぶれがちなるものは胸こそあれ。(同・

一四四段・二七〇ページ)

○かしこきものは乳母の男こそあれ。(同・一八〇段・

三一七ページ)

○世の中になほいと心憂きものは、人にくまれむ事

こそあるべけれ。(同・二四九段・三八〇ページ)

○蠅こそにくき物のうちに入れつべく、愛敬なきもの

はあれ。(同・四一段・九九ページ)

○主殿司こそ、なほをかしきものはあれ。(同・四五段・

一〇二ページ)

○位こそめでたきものはあれ。(同・一七五段・三一五

ページ)

○男こそなほいとありがたくあやしき心地したるもの

はあれ。(同・二五〇段・三八一ページ)

○…、人の心こそうたてあるものは、…と思さる。(源

氏物語②・葵・七三ページ)

○「人の心こそうきものはあれ。…」とうち泣きつつの

たまふ。(同③・少女・五二ページ)

○「…は、いまめきたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ妬き

ことははたあれ。…」など笑ひたまふ。(同③・玉鬘・

一三八ページ)

○「女こそ罪深うおはするものはあれ。…」(同⑥・浮舟・

一三四ページ)

右各用例に難解な単語はなく、いずれも短い一文である。

そうではあっても、これらを読解することは、容易ではない。古く、山田孝雄は、『日本文法論』においても『平安

朝文法史』においても、これら「あれ(↓あり)」を取り

立てていて、その説明の姿勢に異同を見せる。それら用例

の通釈を漠然と造ってみたところ、それより古い時代から

も、そして、現在においても、「はあれ」の上に「に」が

なくても、デアルと訳してきているし、デアルと訳してい

る。これら表現は、時代が下るにつれて、その「はあれ」「こ

そあれ」の上に「に」を入れた「にはあれ」「にこそあれ」

化していくといつてよく、筆者はその追跡をしたことがあ

る。

「…は…こそあれ。」構文の「…は」と「…こそ」とを入

れ換えたかに見える。「…こそ…はあれ。」構文について、

江口正弘は、そのように順序を変えたものだといつてい

た。ハによって示された普遍性ある抽象概念が、コソによつ

て具体的な事例や状態などとして示されていると読みとつ

ているようである。

題述文といったのは、ハなどによって主題を提示して叙

述するところからそう呼んだものである。とにかく、多くの

解決できていない中古のこの表現が、『無名草子』にも

見られたのである。

(18)また、「この世に、いかでかかることありけむと、めで

たくおぼゆることは、文こそはべれな。(三「捨てが

たきふし」文)一八二⑭〜一八三①)

右(18)、この世にどうしてこんなことがあったのだろうかと思

われることは、それは、手紙ですよ、と読みとる一文で

ある。一般に、「文にこそはべれな。」と見て、この世です

ばらしく思われることは手紙ですよ、と読んでいる。

○また、「…、思へど思へどめでたくおほえさせたまふは、法華經こそおはしませ。」…と言ふなれば、…。

(七)捨てがたきふし—法華經 一八六⑭～一八七①

右例、どう考えてもすばらしく思われなさるるのは、法華經が、それでいらつしやる、と読みとれる表現である。法華經に敬意を払ったことになろうか。

(19)それにとりて、夕月夜ゆづくよほのかなるより、有明ありあけの心細き、

折も嫌はず、ところも分かぬものは、月の光ばかり

こそはべらめ。(二)捨てがたきふし—月 一八一⑦

⑪

右(19)、夕方のほのかな月をはじめ、明け方の心細い感じの月まで、折も嫌わず、場所も区別しないのは、月の光だけが、それでしよう、と読みとつた後、その「…は…ばかりこそあれ。」文を口癖にしている女房がいるかにも思えてきた。

○「…。別れにし昔の人も、ありしながらの面影を定かに見ることは、ただこの道ばかりこそはべれ。…」(四)捨てがたきふし—夢 一八四⑩～⑪

右例の「この道」は夢の道、つまり、夢路ということである。

『源氏物語』には、「…こそ…はあれ。」構文をしか見ることができなかつた。その構文による表現が紫式部を語るうとする前段に見られたのである。

(20)歌をも詠み、詩をも作りて名をも書き置きたるこそ、

百年ちとせを経て見れども、ただ今、その主ぬしにさし向か

ひたる心地こころして、いみじくあはれなるものはあれ。(五九

〔女の論—紫式部〕二七六⑦～⑩)

右(20)の、末尾にコソが付随する意味のまとまりと末尾にハが付随する意味のまとまりとを見たとき、普遍性ある抽象的概念を意味しているのは、ハが付随する意味のまとまりのほうである。コソが付随する意味のまとまりは、具体

的な書き残した作品をいつていて、それが、何千年何百年経とうと、対面しているような感じがして感慨深いことに相当するのである。

(21) また、『心高き』こそ、東宮の宣旨せんじなど、今の世にとりては古きもの「」はべれ。…(三五「心高き」  
とりては古きもの「」はべれ。…(三五「心高き」  
二四六③〜④)

右(20)については、「(東宮の宣旨など)今の世にとりては古きもの」という意味のまとまりの末尾に、ハを想定できるかを感じとりたい。そこに、ハが想定できたら、これもまた、題述文「…こそ…はあれ。」構文の用例ということになる。

さて、この題述文の古型にも、係結の原則から外れるものが見られたが、以下の二例とも、わざわざ説明するまでもなく、直ちに結びの流れといえる用例である。

○また、「…昔の契ちぎりもかたじけなく思ひ知らるること  
は、この月ばかりこそはべるを、…」(三「捨てがた

きふし一月」一八二⑧〜⑬)

○また、むげにこのごろ出で来たるもの、あまた見えしこそ、なかなか古きものよりは、言葉遣ことばづかひひ、ありさまなど、いみじげなるもはべるめれど、…。(四六「今の世の物語」二五六⑩〜⑬)

右後例の、「…こそ…はあれ。」構文のハがモになっている点については、ハを末尾に添えて述べようと想定していた事柄が、予想以上に極端な段階に至ってしまったからかに思えてくる。あるいは、もはや、「…こそ…はあれ。」構文としては崩壊しているかもしれないが、発想段階にあつては、「…こそ…はあれ。」構文を意識していたように感じとれてくる用例である。

右二例の結びの流れだけでなく、既に同趣の結びの流れを、第三節において二例、第四節において一例見てきている。当代にあつては、挿入文と見てよい「…こそ…已然形、」の下に、さらに逆接の接続助詞を付けて表現する表現が一般化してきていた、ということであろう。

『枕草子』に見られた題述文「…は…こそあれ。」構文、

『枕草子』『源氏物語』にみられた題述文「…こそ…はあれ。」構文が、この『無名草子』には、七例確認された。あるいはという例もあって、八例と数えることが許されようか。

## 六 題述文「…は…にこそあれ。」文／「…こそ…

にはあれ。」文(新型)の残存形態

『枕草子』に見られた題述文「…は…こそあれ。」文や『枕草子』『源氏物語』にみられた題述文「…こそ…はあれ。」文は、その後、徐々に、「…は…にこそあれ。」文うや「…こそ…にはあれ。」文へと変移・漸移していった。小稿においても、既に触れた旧稿「題述文「…は…こそあれ」と、その変移・漸移の諸相(上)(下)」において観察してきているところである。

例えば、『枕草子』の「秋の野のおしなべたるをかしさは薄こそあれ。」(六五段)は、能因本には、「秋の野をしなへたるおかしさはす、きにこそあれ」(校本枕冊子七〇段)となっていた。『栄花物語』では、「そのなかにもこの帯こそ、いみじき物にてはべれ」など…。(2・巻二三・こまくらべの行幸・四三三ページ)とまでなってい

た。そこには、断定の助動詞「なり」の連用形「に」が入っている。さらに、その「に」の下に接続助詞「て」までが付いていたのである。そして、「…こそ…はあれ。」の「は」は、いつか消えていたのである。

ただ、「…こそ…はあれ。」文については、その新型「…こそ…にはあれ。」文は、視点を名詞文・動詞文・形容詞文の別に移したとき、名詞文と見えてきて、主部に付随するコソが構成するコソ係結名詞文として存在することになるのである。既に、第一節において、該当用例十例を見てきていたのである。それら、主部に付くコソが構成するコソ係結名詞文は、題述文「…こそ…はあれ。」文が、時を経て、主部に付くコソが構成するコソ係結名詞文の「…こそ…にはあれ。」となり、『無名草子』には「…こそ…にてあれ。」「…こそ…にてはべれ。」となっていたのである。第一節において、八例の確かな用例を見てきているところである。

そこで、いま一型の題述文「…は…こそあれ。」文が新型となった「…は…にこそあれ。」文は、どう捉えられることになるか。「…は…にこそあれ。」の「に」が断定の

助動詞「なり」の連用形であるところから、その最末尾の「あれ」は、補助動詞としての「あり」の已然形と認めなければならぬことになる。断定の助動詞「なり」を用いた断定表現「…なり。」にコソが介在しているところから、筆者はこれを述部内強調の（注）コソと呼んできている。

(22) 『伊勢物語』など申すは、ただ業平（なげぢら）が好き心のほど見せむ料（れう）にしたるものにこそはべれ。(四七〔伊勢物語・大和物語〕二五八⑦～⑧)

右(22)の述部は、「業平が好き心のほど見せむ料にしたるものなり。」にコソを介在させ、丁寧語を用いた表現にしたものである。「…は…にこそあれ。」構文に倣う用例として、他に(二〔捨てがたきふし〕月一八一⑥～⑦)(二二〔狭衣物語〕さらでもありぬべきこと)二二四⑧～⑩)が見られ、それぞれの述部は、「かやうの道ばかりにこそはべらめ。」「殊（こと）の外（ほか）なることどもにこそあんめれ。」となっている。(四七〔伊勢物語・大和物語〕二五八⑩～⑬)は、類似的の事柄を取り立てたからか、ハに代わってモを用い、

その述部は、「かの至らぬ隈（くま）なきしわざにこそはべるめれ。」となつてゐる。

(23) また、人、「すべて、あまりになりぬる人の、そのままにてはべるためし」「、ありがたきわざにこそあめれ。…」(五三〔女の論―清少納言〕二六六⑫～⑭)

右(23)の空欄部にハを想定したとき、その一文は、「…は…にこそあれ。」文と認定することができよう。提示のはたらきのハの非表出は、小稿の用例(16)などにおいても見えてくるところである。さらに、その提題性の文の成分そのものが省略されることも多く、これまた、(16)の用例に続いて引いた(八〔源氏物語〕一八九①～②)においても見えてきている。『徒然草』の「(命は、)長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。」(七段)も、その用例である。

○心ざま、振る舞ひなどぞ、いと心にくからず、かばかりの歌ども詠み出づべしともおぼえはべらぬに、(和泉式

部ノ歌数ノ多サハ」しかるべき前の世のことにこそあ  
んめれ。(五五「女の論—和泉式部」二七〇③)〜⑤)

右例は、和泉式部の歌数の多さをいって、それは前  
世からの因縁だといっている。(五三「女の論—清少納言」  
二六七⑨)も、その述部「いとみじかりけるものにこそ  
あめれ。」から見て「清少納言ノ和歌ハ」が想定されて  
こよう。

さて、この述部内強調のコソ係結文にも、係結の原則に  
外れる用例が見られた。

○何事も「文以外ハ」たださし向かひたるほどの情はか  
りにてこそはべるに、これは、ただ昔ながら、つゆ変  
はることなきも、いとめでたきことなり。(三「捨てが  
たきふし—文」一八三⑭)〜一八四①)

○また、「…、この人の身には、あるが中に恨めしき  
ふしある人にてこそはべるを。…」と言ふも、…  
(二五「夜の寝覚—めでたき人」二三二④)〜⑦)

右前例は、接続助詞「に」に接続させてしまった結果の  
結びの流れであり、右後例は、間投助詞「を」に接続させ  
てしまった結果の結びの流れである。

以上、述部内強調のうちの、断定の助動詞「なり」の連  
用形「に」やそれに接続助詞「て」が付いたものにコソが  
付いた用例を観察してきた。それらは、題述文「…は…こ  
そあれ。」文が変移した結果の述部内コソ強調文であった。

### 七 『無名草子』に見る主部のいろいろに付随する

コソ

改めて並べ立てるまでもないことだが、小稿は、各節の  
順に従って、『無名草子』のなかに見るコソ係結文のコソ  
が主部といわれる文の成分に付随した用例を逐一追って、  
その観察と整理とを続けてきた。それは、各節の見出しの  
順で、一に主部に付くコソが構成するコソ係結名詞文、二  
に主部に付くコソが構成するコソ係結動詞文、三に主部(対  
象語)に付くコソが構成するコソ係結形容詞文、四に提題  
のハを付随させた主部(提題の文の成分)とコソを付随さ  
せた主部(対象語)とから成る係結形容詞文、までのとこ

ろで、四種類のコソを付随させた主部が確認された。五には、題述文「…は…こそあれ。」文／「…こそ…はあれ。」文(古型)の残存用例が見られた。その「あれ」の主部としてのコソを付随させた主部が存在することになって、これが二種類あるところから、六種類のコソを付随させた主部が認識されることになるのである。前節の六に取り上げた第述文「…は…こそあれ。」文／「…こそ…にはあれ。」文(新型)の残存形態は、コソに付随する主部としては後者が第一節のコソ係結名詞文に変身しており、後者は、述部内強調のコソ係結文ともなってしまうのである。ここで注目したいのは、構文が変移を見せるということである。

小稿の第四節・第五節には、無助詞の文の成分について、助詞を想定して読解を試みてきている用例が含まれている。それら用例については、改めて、その読解に挑戦したいと思っている。小稿は、その前提として、コソを付随させた主部が、この『無名草子』においては六種類存在したことを報告するにとどめておきたいと思う。

## (注)

1 拙稿『徒然草』コソ係結文の構造と兼好の認識の論理(『國學院雑誌』第一二〇巻第九号、二〇一九年九月／拙著『文構造の観察と読解』(新典社、令和四(二〇二二)年)にI中古和文と『徒然草』の〔3〕『徒然草』コソ係結文の構造として収録)

2 文部省(後に文部科学省)検定教科書・学校図書『中学国語II』(昭和四九(1974)年度以降令和二(2020)年度末の廃刊まで)に、この文論を採用していただいた。その現場教師向け解説を中学校指導シリーズ国語『口語文法のあゆみ―『学図』のわかりやすい文法―』(学校図書、昭和五二(1977)年)によって試みた。また、拙稿「いま、文の成分はどう捉えられているか(上)(下)―中学校教科書の「一語」と「一部」となど―」(『國學院雑誌』第一〇〇巻第一〇・一二号、一九九九年一〇・一二月／拙著『文構造の観察と読解』にIV学校文法の文の成分の〔1〕検定教科書の文の成分として収録)において、各社の姿勢の違いを比較してみたこともある。

3 佐久間鼎『日本語の特質』(育英書院、昭和一六(1941)年)と三上章『現代語法序説』(刀江書院、昭和二八(1953)年)とから名詞文・動詞文を学び、川端善明「用言」(『講座日本

語 第六卷 文法Ⅰ』所収、岩波書店、昭和五一(1976)年)から形容詞文を学んだ。

4 例えば、鈴木眼『言語四種論』(文政七(1824)年)は、現在の形容詞と「あり」とを一つにして「形状ノ詞」と呼んでいる。

5 時枝誠記『国語学原論』(岩波書店、昭和一六(1941)年)第三篇「各論」第三章「文法論」四「文の成立条件」二「文における格」(一)「主語格と対象格」(三七三ページ以降)において、対象語と呼んでいる。

6 注1参照。一単語の抽象概念性名詞とコソを用いて取り立てた主部(対象語)に形容詞が述部として用いた一文はその抽象概念性名詞の普遍的性情をそのままなるう。そこで随想的文章には、そのような文がおのずから多くなるように思われる。ただそこでも、「神楽こそ」(一六)「和歌こそ」(一四)「神の社こそ」(二四)「秋こそ」(一九)「始め終りこそ」(一三七)などと見る程度であった。

7 「これは、いつもめづらしからぬ常盤の蔭にて、有栖川の音より外は人目稀なる御住まひにて、いつもたゆみなくおはしましけむほどこそ、限りなくめでたくおぼえさせたまへ。」文が、この(六二)〔女の論—大斎院(選子)〕二八二③④

ほど)である。その「(限りなく)めでたく」という形容詞連用形は、時枝誠記のいう「思ふ」等の上にある連用形で、「めでたしと」に相当し、コソがあるところから「めでたけれど」に相当することになるう。つまり、表現の論理からは、「限りなくめでたけれどおぼえさせたまふ」であるはずの文意が、注9に見る引用文外の末尾に結びが現れる用例と同じく、結びが引用文外の「とおぼえさせたまへ」に及んでしまったものと見ることができよう。したがって、動詞文となっても、その実質は形容詞文と解されるところから、(11)の類例と判断した。

8 使用テキスト新全集本は、その「まめ人の大将」を(まじめ人間の大将夕霧が)と現代語訳している。

9 例えば、三矢重松『高等日本文法』(明治書院、明治四一(1908)年発行、大正一五(1926)年増訂版)の第十五章第四節係結三係結の変コソの結にも、「この帝……父帝の位に即かせ給ひて五日といふ日に生れ給へりけむこそいかに折さへ花やかにめでたかりけむと覚え侍れ(大鏡)」などが引かれていて、このような係結については古くから広く認識されている。

10 一般に主語が重なるとみられる「象は鼻が長い。」文の第

一主語「象は」を草野清民が総主語と呼んだのを受けて、いま、この文構造の文を総主文と呼んでいる。その古典語文を見たとき、ハ・コソを伴わない用例「死し子、顔よかりき。」(土佐日記／小田勝『講古典文法総覧』指摘)も見られるが、ハ・コソ係結形容詞文にその該当用例が多いことも事実である。この注記は、追って取り上げる用例(16)に向けてのものを受けとめていただきたい。

11 山田孝雄は、『日本文法論』(宝文館、明治四一(1908)年発行、昭和二七(1952)年重版)第一部語論第四章語の運用、第四語の用法(四)助詞の用法(一一一五ページ)において、これら「はあれ」「こそあれ」については係助詞が付属するときは「に」を省いて「あり(↓あれ)」に接しているとしているが、『平安朝文法史』(宝文館、昭和二七(1952)年発行、昭和四三(1968)年第五刷)第二章語論第二節用言(一一九ページ)においては、同じ「はあれ」「こそあれ」について「あり(↓あれ)」が上に係助詞を必須として統覚を表しているとしている。これら「あり(↓あれ)」の認識が、「に」を省いたという説明から「あり(↓あれ)」そのものに統覚の機能があるという説明へと移っている。

12 拙稿「題述文」：は…こそあれ」と、その変移・漸移の諸

相(上)(下)」「(國學院雜誌」第一〇五卷第七・一二号、二〇〇四年七・二月／拙著『文構造の觀察と読解』のI中古和文と『徒然草』の〔2〕擬述文」：こそあれ」と、その漸移・変移として収録)

13 江口正弘「こそあれ」考―文型と意味―」(『国語学』第五五号、昭和三八(1963)年二月)

14 拙稿「係結の構文論的考察」(『文教大学国文』第一〇号、昭和五六年三月)／平成七年一月刊行の拙著『補助用言に関する研究』(右文書院、第三編第八章として収録)において、被補助語に下接する係助詞の結びが補助語に現れる一群が述部内に見られるところから述部内強調と呼んで取り扱った。